

寺
ごよみ

十月

寺報 空華善巧

発行
 〒938 富山県下新川郡
 宇奈月町浦山497
 白雪山 善巧寺
 TEL・FAX (0765) 65-0055
 TEL オテラザ 65-0975

十月十九・二十日
 空華忌
 報恩講
 布教 川崎順正師
 講話 利井明弘師

| | | |
|-----|-------|----|
| 一九日 | 午後一時 | 逮夜 |
| 二〇日 | 午前七時 | 晨朝 |
| | 午前十時 | 日中 |
| | 午後一時 | 満座 |
| 布教 | 川崎順正師 | |

| | |
|-----|---------------------|
| 二二日 | 富山・報恩講 |
| 二三日 | 田家・窪野・柳沢・経 田・報恩講 |
| 二五日 | 新浜・飯野・報恩講 |
| 二六日 | 東狐・青木・報恩講 |
| 二九日 | 板屋・報恩講 |



十一月の空華忌に、ご縁に遇わせて頂く、利井明弘であります。今号は、ご住職ご不例のため代理として書かせて頂きます。善巧寺の門信徒の皆さんに呼ばました。「若はん、若はん」と善巧寺の門信徒の皆さんに呼ばれて、あちこちと走り回つていた姿が目に浮かびます。早いもので、その弟がなくなつて、もう丸三年になります。弟が善巧寺にご縁を頂いたのも、僧鎧和上の冥護のたまものであります。私たち兄弟が育った高槻の常見寺には、行信教校という、創立以来百十餘年になる宗学を学ぶ塾があります。この塾は私たちの曾祖父鮮妙が創設したものです。何が、実はこの鮮妙は僧鎧の曾孫弟子に当たるのあります。現在も全国から集まつた九十名余りの学生が、僧鎧和尚が説いて下さった空華の宗学を学んでいます。その中には、次の善巧寺を背負つて立つ俊隆君もいるのです。あと数年もすれば、僧鎧和尚の教えを学んで立派なお坊さんになつてくれるでしょう。

善巧寺に残る記録によれば、

空華忌に思う

僧鎧師の百回忌には、行信教校初代校長の鮮妙がご招待を受け参詣し、百五十回忌には、私たちの祖父興隆が、大阪から善巧寺に参つております。しかし、ご法話をさせて頂き、その時に父と共に参詣させて頂いた時に話してくれた隆弘も今はお淨土です。又、その時、参詣の記念にと桐溪先生、山本先生、それに父の三人が寄せ書きした軸が今も善巧寺の書院に掛かっていますが、ついこの間のことなのに、この世には一人も遺つてはおられないのです。何と人生は無情ではありますせんか。しかし、私たちには幸いお念佛を聴聞させて頂いています。急ぐこともあります。急ぐこともありませんが、お淨土で、この世では遇うことができなかつた僧鎧和尚や、鮮妙をはじめご縁あつた人たちと、どんな風にお遇いすることが出来るのか、今から楽しみにしているこの頃であります。

常見寺住職 利井 明弘



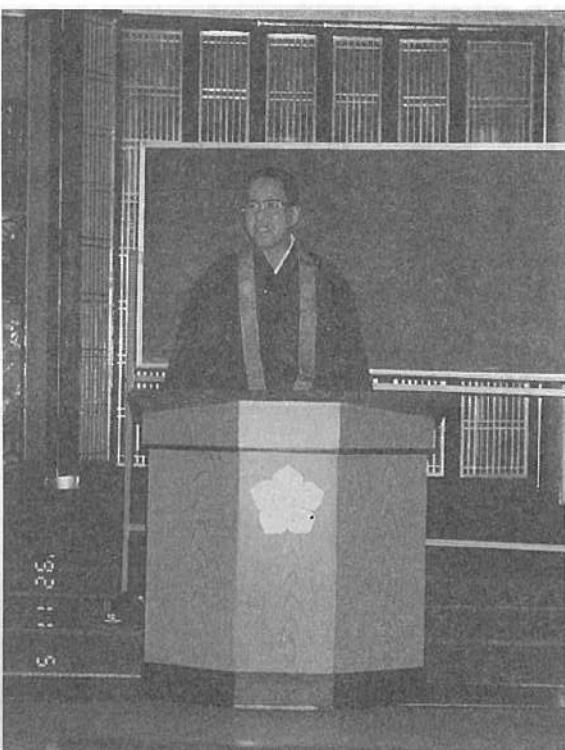
空華忌講話

行信教授教授
あぐる

瑞夢師

ずい む

②



文類聚鈔

それから、次にこのご本典を簡略化したようなお聖教が正式には「分類聚鈔」といわれます。これは教行証の御文を集めたものという、その文類であります。その文類を集めたもの、抜き書きしたものとのことで、こ

れを「略典」と申しています。ですから、このご本典を略典に對して「広典」という場合があります。その略典にご本典と同じような言葉が出てくるんですね。それはどういうことかと申しますと、「本願力回向を案するに二種あり」として、一つには往相、二つには還相とこ

うおっしゃるんです。そして、この往相の中に「大行あらり、淨信あり」という言葉になってしまいます。すなわち真ん中の行、信があつて教、証といふのは略してあるんです。それは、これはどちらがなくてもいいというんではありませんが、この中で一番肝心なもの、今日は私が絶対これは離してはならんというものを、ここに掲げてあるんです。それはなぜかと申しますと、この行信といふのは、これは「因」なんあります。この因を今日私達もここでちゃんと結んでおきますれば、これさえ行じておられます、因に報われた証果といふものは自然に現れてくるものなんですか、一番大事なものは因であります。私達がお淨土へ往生して、そして仏になるということは、そうなるために、今生きてここで私達ちゃんとその因を結んでおかねばならない、とこういうことがあります。お淨土にまいる道でありますから、その道程を間違いなく、疑いなく、ちゃんとふみしめておられれば、死に方はどんな死に方をしましようとも、お淨土へまいるのは決まりましたことになります。そう

ておかねばならないということあります。だからこの行信が大事なんです。そしてここでもいるのでは、信心正因といふことをよく聞いておいでになりましようけれども、あそこでは信心が正因で称名は報恩行、即ち非因といふのに、私が今ここで行と信とが因だと、いうことを申します、ということをも、ちょっと注意しておいてもらいたいんです。そこにすなわちさつきもいいましたように、行は法然聖人の念佛往生、信は親鸞聖人のお心であります。ですから、行信、この念佛往生というご法義と、親鸞聖人の信心とは、これは離せられないものだという事なんです。

これが時代がずうっとさがつてまいりまして、蓮如上人当時になつてしまりますと、またこれは対淨土宗、それは法然上人ではなくて、法然上人のあとを續く京都で言えば知恩院などの淨土宗ですね、そういう淨土宗の人達が、法然上人の教えをちょっと間違つて受け取つてゐるんじやないか、ということを批判なさることで、親鸞聖人の行と信とが、これは法然上人と親鸞聖人の、これは離せられないものだと味わつてもらいたい、ということことは念佛と信心とは離したるものではない、こういうことなん

これが略典であります。

正像末和讃

それからその次に「正像末和讃」の中にもう一つ和讃があります。それは「南無阿弥陀仏」というご法義を掲げて、当時の回向の、恩徳廣大不思議にて、人々に宣布してくださいましたんであります。ですからその法義が今日ずっとひいていて私達は、それに浴しておりますので、これは一つそれだけを理解しておつたのでは、うつかりすると親鸞聖人のご法義と離してしまつたのでは、信心正因稱名報恩にはならないであります。それでこの信心正因稱名報恩と親鸞聖人の行と信とが、この信心正因稱名報恩といふことをよく聞いておいでになりましようけれども、あそこでは信心が正因で稱名は報恩行、即ち非因といふのに、私が今ここで行と信とが因だと、いうことを申します、ということをも、ちょっと注意しておいてもらいたいんです。そこにすなわちさつきもいいましたように、行は法然聖人の念佛往生、信は親鸞聖人のお心であります。ですから、行信、この念佛往生というご法義と、親鸞聖人の信心とは、これは離せられないものだという事なんです。

これが略典であります。

これが略典であります。



ます。こちらの方は漢文で書かれてますから、なかなか難しく、読みずらいのであります。しかし、このご和讃ならどんなものでも、また歌にして、先程も皆さん「弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫をへたまえり……」ともう暗記してござるでしょう。いつも頃覚えられましたか。そんなことわからないでしよう。もう昔から何遍も何遍も繰返し歌つ

るようにならう。このご和讃にはこもつてゐるがこのご和讃にはこもつてゐるのです。だからもう一遍これを読んでみてください。「南無阿弥陀仏の回向の、恩徳広大不思議にて、往相回向の利益には、還相回向に回入せり」とこういふご和讃なんあります。(この講話は昨年の空華忌に於ける出講いただいた折のものです。)

雪華院釋隆弘師四回忌
釋隆弘師が還淨されてまる二年。お祥月命日の九月十七日には、各地から、お供えのお花やお菓子などが各々の思いをのせて届けられました。偲ぶ会では鬼原勝次さん、中山慶一さんにて代表と共にお経会のメンバーが内陣余間でお焼香し、ありし口を偲びながら、高務哲量先生の講義に耳を傾けました。

雪華院釋隆弘師四回忌

空華忌
四日午後七時半初夜
五日午前七時晨朝
日午前十時日中
午後一時滿座

いかに自分の中がすさまじい地獄であるか、私は人とはちょっと違うだろうと思つていた悪い心の存在を見せつけられて、自分がすこしこわくなりました。そして『ブッド・バイ』を読んで今まで納得できずにいた、死を見つめて生きることの意味を知りました。これまで、なんでこんな若くてこれからだという時に死について考えて生

すね—真城文華—

山口でお会いした高校三年生からのお便りです。受験勉強の最中にもかかわらず、講演を聞いて下さったご縁で、二冊の本を読まれたのですが、著者のメッセージをこんなにしっかりと深く受取って下さっています。

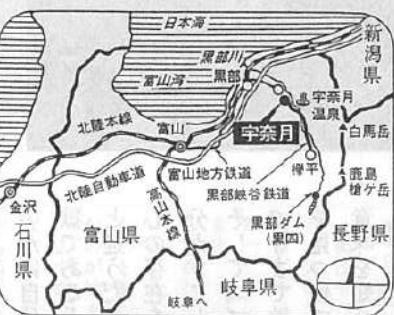
笑顔のかわいいチャーミングなお嬢さん。お会いできてよかつたとつくづく思いました。



14

「お寺座」から

■富山県宇奈月町 ■
文・中村貴美江



文化の芽が育つ

お寺の雪ん子たち

毎週月曜日の午後三時を過ぎたころになると、善巧寺の境内には子どもたちが次々と集まつてくる。「女先生、見て見て。膝擦りむいちやつた、こーんなの」とケガ白慢する小さい子もいれば、その子たちの面倒を見る大人びた高学年の子どもたち。

この日は「雪ん子劇団」の稽古日。四時からはじまる芝居の練習を前に、緊張をほぐすための「鬼ごっこ」がはじまつた。

黒部峡谷と温泉の町として知深く結びついてはじめて生きてくる」と、男先生であるご主人の雪山隆弘さんとともに「宇奈

山地区にある善巧寺では、もう

かれこれ十五年もこうした光景が繰り返されている。お寺を文化の発信基地に、と小学生の子どもたちによる「雪ん子劇団」が結成されたのは一九七九年のことだ。

「お寺は本来、亡くなつた方のためのものじやなくて、生きている人が集まる場所。そこから、歴史的にもいろいろな文化が生まれきたんだですよね」と善巧寺の女先生こと、雪山玲子さん(五二)は語る。「お寺におけるあらゆる活動は、地域の人々と深く結びついてはじめて生きてくる」と、男先生であるご主人の雪山隆弘さんとともに「宇奈

月夢を語る会」な

ど、お寺を中心とした活動をはじめたのも、やはり同じころのこと。

二年ほど前、ご主人の隆弘さんが直腸ガンで亡くなつた。二人で築いてきた仕事だつた。これから先、

どうしよう、と女先生は考えた。「私が後に残されたのは、こうしたものを次の世代につなぐ仕事をさせてもらうためかなと思つていま

す。楽しいことはやめたくない、ひとつとしてなくしたくないものばかり。だからあまり力まずにやれるところまでやつてみよう、そう思つたんです」と、玲子さんはさらりと言つてのける。

雪山玲子さんは善巧寺の跡取り娘である。二人の出会いはお見合い。隆弘さんは大阪のお寺の二男坊だった。といつても、二人ともいきなりお寺の仕事に入つたわけではない。隆弘さんは演劇青年で早大・演劇科の学生時代には劇団「四季」と「青

院大学を卒業後、三年ほど北日本放送のアナウンサーの経験を持つ言葉のプロ。舞台の経験はないが、大の演劇好きである。

いずれは寺に戻ることが、結婚の条件だった。隆弘さんが「もういいかな」と言いだしたのは、記者生活にも磨きのかかつた絶頂期。まったく突然のことだった。「仕事もこれから面白くなるのに」と周囲は止めたが、本人は「どこでも楽しくできるだろう。そろそろ本拠地に帰るよ」と、ごく自然に口にしたという。

この会の恒例となつた催しもこの一つに「野休み落語会」がある。年に一度、六月中旬の田植えが一段落ついたころ、永六輔、入船亭扇橋、柳家小三治の三人が善巧寺にやつてくる。雪

山隆弘さんがマスコミ時代に知り合つた永六輔さんとの縁ではじまり、これも十数年続いていり。「落語はもともとお寺の説教からはじまり、高座という言葉もそこからきていくというから、これは本家返りかもしれない

就職の時、自分の俳優としての将来に見切りをつけ、「産経新聞」の記者となつた。「夕刊フジ」発刊のメンバーのひとりである。新聞記者として大阪、東京のサラリーマン生活も経験した。二人が結婚したのはこの間のことである。出会つて数時間、話をするうちに意気投合してしまい、五ヵ月後には式を挙げた。

「昔はこの境内でも盆踊りをしつたもんや。昔はよかつた」という話が出れば「昔の話しどつてもしようがない。盆踊り、やろうやないか」と実行していく。そういうふうにして、ものごとが進んでいった。「お年寄りや子どもたちに喜んでもらえて、かつ自分たちも楽しめること」を見つけ、実行していく「宇奈月夢を語る会」は、こうした雰囲気の中から生まれた。

この会の恒例となつた催しもこの一つに「野休み落語会」がある。年に一度、六月中旬の田植えが一段落ついたころ、永六輔、入船亭扇橋、柳家小三治の三人が善巧寺にやつてくる。雪山隆弘さんとともに「宇奈月夢を語る会」な

連載 地域が自立する (Continued from the previous issue)

運び、碁を打つたり将棋を指したりの日々が続いた。そのうち人に集まつてくるようになつた。茶飲み話、いや酒飲み話に花が咲く。情報をさりげなく引き出してくれる技は、マスコミ時代の経験が役に立つた。

「昔はこの境内でも盆踊りをしつたもんや。昔はよかつた」という話が出れば「昔の話しどつてもしようがない。盆踊り、やろうやないか」と実行していく。そういうふうにして、ものごとが進んでいった。「お年寄りや子どもたちに喜んでもらえて、かつ自分たちも楽しめること」を見つけ、実行していく「宇奈月夢を語る会」は、こうした雰囲気の中から生まれた。

この会の恒例となつた催しもこの一つに「野休み落語会」がある。年に一度、六月中旬の田植えが一段落ついたころ、永六輔、入船亭扇橋、柳家小三治の三人が善巧寺にやつてくる。雪山隆弘さんとともに「宇奈月夢を語る会」な

せんね」と玲子さん。「とにかく、面白そだなと思つたことはどんどんやつていく。そうしているうちに、不思議なもので、こんなのはどうだろう、あれもできそうだ、と夢は向こうからやつてくるんです」とも。

話を聞いているうちに周りが騒々しくなった。「雪ん子劇団」の練習の時間がきたのだ。二年前に新しく建てられた稽古場には、子どもたち特有の日なたの匂いが満ちている。全身を使っての発生練習。女先生のリズムをとる声が響く。目立ちたがりの元気な子、引っ込み思案の子、性格も体格もさまざまな子どもたちが、精一杯に声を出そうとしている。そのエネルギーのすごさに圧倒される。

プロの劇団ではない。未完成の練習風景とあれば、お芝居の内容も決してまとまっているとは言いがたい。照れたり拗ねたり。だが、そんな不拘いな子どもたちの表情が美しい。

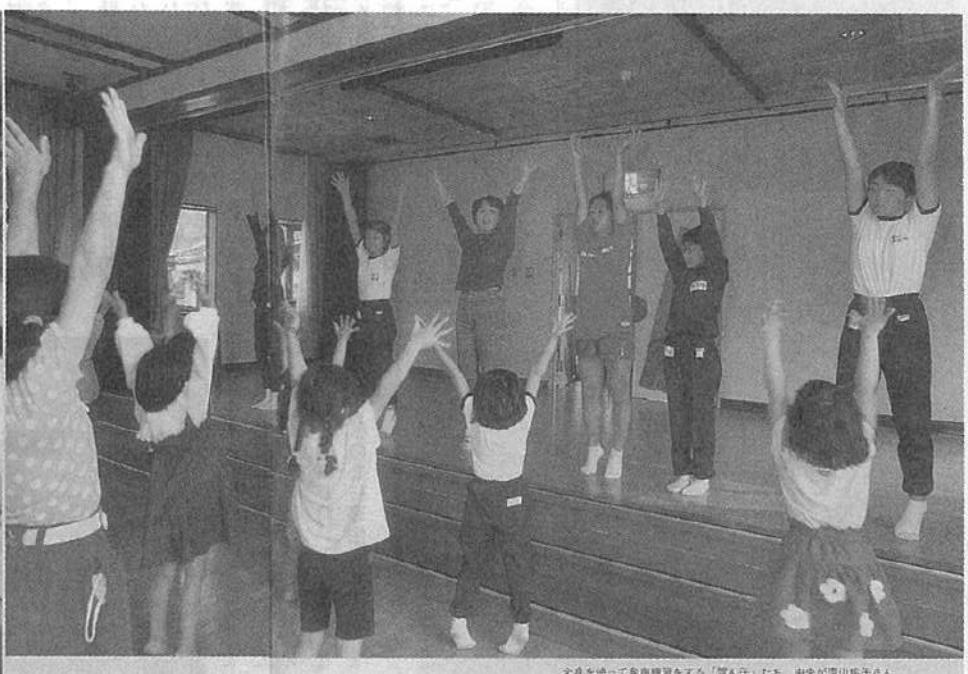
日曜学校からはじまつた「雪ん子劇団」の最初の公演は、お寺の本堂だった。雪ん子たちはここを「お寺座」と呼ぶ。招かれての公演も多いが、この「お寺座」公演は今も健在だ。第二期生でもある娘の雪山有花さん(二四)は、いまでは劇団の事

務の面倒を見る。かつての女先生の役目を立派に果たしている。子どもたちは中学生になり、劇団を卒業しても、懐かしさに訪れてくる子が多い。もう何年かすれば二代目の「雪ん子」たちが入つてくる時代になつた。演劇を核にして世代を超えた子どもたちの輪が広がりつつある。子どもたちはかりでない。陰で活動を支える親たちの間にも連帯感が生まれている。なによりも、こうした活動が毎年、受け継がれ積み重ねられてきたことの意味は大きい。

(中略)

一方で、お寺という昔ながらの拠点を軸に文化の芽が育つつある。身近なことから、力まずに楽しみながら進めていくといふノウハウは、大いに活用されれるべきだろう。たまたま演劇というものが核になつたということはあるが、ここから育つた子どもたちや、地域の人々との輪は、町の活性化にとって大きな可能性を秘めている。育ちつづかる文化の芽が、今後どのような形で町全体とかかわっていくのか、楽しみだ。

(なかむらさみえ 編集部)
(毎日新聞社出版 週刊「エコノミスト」七月十三日号より)



全員を使って角声練習をする「雪ん子」たち 中央が雪山有花さん



「野休み」も含めて15公演を企画した



練習自の東京は緊張を解くのに立つ



人気レバートリーの練習に力が入る

本山助成会
若林真人師
ご講話



今年の本山助成会は善巧寺がお宿をしましたが、このご縁に行信教校の若林先生のご講話を聴聞する機会を得ました。風貌などが隆弘師に似ておられるらしく、また是非おこしいただきたいともっぱらの評判でした。

あみださま見てください

十六年間の盆おどり史上はじめての雨で、今年は本堂の真中に太鼓をどんどんとおいて、阿弥陀さまにお見せするかのような盆おどりになりました。かなりの大雨の為、人出も例年の半分ほどでしたが、日校OBGは相変わらずの賑わいで、子供たちを楽しませてくれました。

今年の本山助成会は善巧寺がお宿をしましたが、このご縁に行信教校の若林先生のご講話を聴聞する機会を得ました。風貌などが隆弘師に似ておられるらしく、また是非おこしいただきたいともっぱらの評判でした。



盆会で空華殿に集う総代方



● 新しいジャンルに挑戦したい
雪ん子劇団初の旗あげ公演は、富山別院で行ったミュージカルとのいぐるみ劇です。それが今年でもう14年目。公演は寺や中央公民館などでお芝居です。

くれますから。主人は他界しましたが、彼の思いをつぎの時代に伝えた
い、そして主人がなし得なかつたジャンルにも挑戦したいという新たな熱意が、私の心に芽生え始めています」



雪山玲子

人生のゆとり
だと思う



→ KKシードー・エー・ピー出版
「ゆとりの王国 富山をめざして」より



お寺でのミュージカル公演です

下新潟郡宇奈月町出身、51才
主宰。地元に昔から伝わる民話など、身近なテーマを振り起して芝居やミュージカルとして上演。多くの人々から共感を呼んでいます。

● 日曜学校から芝居へ

劇団をつくったのは昭和54年のこと。

大阪で新聞記者をしていたご主人は寺の跡取り娘の玲子さんと縁あって宇奈月に住むようになりました。

当時、ご主人は「お寺というのは、もともと人の集う場だったのではないか」といっています。そして、もっと開かれたお寺にしたいと思つたのが始まりです。

まず始めたのが日曜学校。180人ぐらいの子供たちが集まり、学校からは「もうひとつのお校」というニックネームがついたほどです。しかし、日曜学校を続けていくうちに、ある疑問やもの足りなさを感じ始めました。もつと一対一で子供たちと接したい、一方通行の日曜学校ではいけない……と考えた末にてた答え

行っていますが、雪山さんにとって、いまや劇団は生活の一部です。

よく人から大変でしようと聞かれますが、私にとっては楽しみであり、それはゆとり、人生のゆとりでもあります。

だつて、たくさんの人との出会いや経験、喜びや失敗、数えきれないほどの思い出を与えて

住職はいま

七月三日に入院して以来、お盆に二晩帰院しただけの住職は黒部市民病院での生活も三ヶ月になります。最も頼りとする妻が、四六時中側に居るのが何よりもうれしい様子で、リハビリに励む日々を過ごしています。みなさまにはお見舞いしていただきたり、ご心配いただいたり、ありがとうございます。

祠堂会を前にしての清掃奉仕に、またたくさんの方がご協力くださいました。(敬称略)

浦山力四の紹介 沢田修さん
が二口実さん中利夫さんらと、
五日間にわたって境内、裏庭の
木の剪定をして下さいました。
おかげで鐘楼前から裏庭にいた
るまで、すっきりと涼しげにな
りました。

金沢のお友達と
演劇交流



若院隨想

行信教校での学期末テストが終ると同時に帰省し、七月十六日の祠堂会から私の夏は始まりました。その後、十七日の勉強会、御助成、お講、お葬式、寺参り、上法事、盆おどりなど、フル回転でした。門徒の方々には、はじめて善巧寺の若院を生で見た、という方もおられたこそでしよう。これだけフル回転させていただいたのには、それなりの理由があるわけで、それは祖父の入院という縁からです。祖父はご存じのとおり、今、黒部市民病院に入院しています。

自分が動かなくなつており、白立つことさえままならぬ状態です。病院には祖母がつきつきでいます。苦しい顔一つ見せないのですが、祖母の体も心配になります。祖父は毎日、ベッドの上から祖母の名を呼び、祖母はそれにやさしくこたえます。とてもあたたかい雰囲気で、まるで新婚夫婦でも見ているようです。

しみをさけて通り、自分の身にかかるつてくるまで、気づけない。相手の立場に立つということがどんなに難しいことかを教えられます。こんなことも感じながら、みんなのおかげで住職代理の仕事をなんとかつとめることができました。

また、今年の夏は雪ん子も大いそがしでした。四回の公演に夏の合宿、そして夏の終りには石川の「さくらんぼ」という劇団との交流会——等々。

さて、九月十三日から、行信教校の二学期、年齢を越えた場での生活がまた始まります。

| | |
|-----|-----------|
| 三日 | 愛本新・報恩講 |
| 四日 | 中ノ口・報恩講 |
| 五六日 | 下村 |
| 七日 | 大橋 |
| 八日 | 下立愛本 |
| 九日 | 内山・赤田 |
| 一〇日 | お講・浦山 |
| 一一日 | 音沢・報恩講 |
| 一二日 | 富山教区歳末助け合 |
| 一三日 | 雪ん子・年末児童 |
| 一四日 | 雪ん子チャリテ |
| 一五日 | お寺の学校もつ |

い募金
り大会
き

宇奈月町教育委員会の協力も嬉しいことでした。

報恩講

十月十九日 午後一時 速夜

午後七時半初夜

十月二十日

午前七時 晨朝

午前十時 日中

午後一時 満座

布教 川崎順正師

空華忌

お寺の報恩講が近づいてまいりました。十月十九日、二十日には、おさそい合わせの上、是非お参り下さいますように。

ホンコさんは親鸞聖人のご法事です。浄土真宗の門徒として大切なご法要です。お忘れなく。

十一月四日 午後七時半初夜

五日 午前七時 晨朝

午前十時 日中

午後一時 満座

講話 利井明弘師

善巧寺にとつて大切なご法事明教院僧鎧さまのお祥月の法座です。お弁当も準備しています。お忘れなくおまいりください。

今年は隆弘師の兄、行信教校校長の利井明弘師のご講話です。

清掃奉仕おねがい

十月十六日 八時

報恩講を前に（浦山地区祭礼の為、浦山以外の方）

十一月一日 八時

空華忌を前に

十二月十六日 八時

今年最後の越冬清掃

本山では念佛奉仕団があつて全国から門徒さんがエプロンがけて清掃奉仕をいたしますが、ねがいたします。報恩講前と空華忌前、年末の三回行います。いずれかご都合のつく日にお願いします。七月にご協力いただけなかつた方、特によろしく。

本山では念佛奉仕団があつて全国から門徒さんがエプロンがけて清掃奉仕をいたしますが、ねがいたします。報恩講前と空華忌前、年末の三回行います。いずれかご都合のつく日にお願いします。七月にご協力いただけなかつた方、本当に淨土真宗の門徒とならせていただいているか、否かを、

（二二六二）十一月二十八日（旧暦）に往生された、親鸞聖人の祥月法要を、報恩講と呼ぶようになりました。単に、ご祥月の法要といわれば、親鸞聖人の深いお

三代覚如上人のときからのこと

あります。單に、ご祥月の法要といわれば、親鸞聖人の深いお

再確認するための重要、かつ厳しい法要でもあるのです。あなたはいかがでしようか。これは、天岸淨圓先生が、探究社より発行の『よろこび』No.40報恩講特集にお書きになつたものです。報恩講を前に、あなたもどうぞ自分の心に問い合わせみてください。

この夏、善巧寺はのべ千人をこえる人々で賑わいました。

高岡JA婦人会が聴聞に、奈良の夫婦がご晨朝のおまいりに。

ご法事 聞法 勉強会。

子ども盆おどりでは子供たちが百人をこえ、雪ん子たちは、

月の半分をお寺通い。まさに、生きとし生けるものが集う場であります。

一方、マスコミの取材も、雑誌『VOLICE』の連載執筆の辺見じゅんさん、北日本新聞、NHK富山。エコノミストを読んだNHK暮らしのジャーナルからも電話取材があり、これまでにも電話取材があり、これまでにぎやかなこと。

うれしいですね。お寺が繁盛するつてばらしいですね。

夫と同じ言葉がつい出てします。

告知板

☆お焼香 お忘れでは

ないと思いますが、ご

当流では、一礼して一

回つまんで、いただか

ずにくべるだけ。あと

は合掌、お念佛、礼拝、

一礼しておわりです。

☆ホンコさん 親鸞聖

人のご法事をつとめるのですが

ら、それなりのご用意を。仏だ

んのおそじと、お花、お仏飯、

赤いローソク、おけそくがあれ

ばけつこう。そして、おつとめ

の際はお坊さんと一緒に合掌、

念佛、礼拝、聖典をひらいて声

を出してお正信偈を。

☆順番 ホンコさんまわりの順番を、決めて下さる地区が多い

のですが、いつも通り適当にと

いう地区もあります。待つのは

とても辛いものです。寺はいわ

れた通りにまわりますから、な

るべく順番を決めておいてくだ

